

『古代エジプト人の 24 時間—よみがえる 3500 年前の暮らし』を読んで考えた古代エジプト社会

岩瀬 有

今回この作文を書くにあたって参考図書を眺めていた時に目に入ってきた本書は、アメリカの考古学者、エジプト学者のドナルド・P・ライアンが著し、大城道則さんが日本語版を監修した。この本で語られる舞台は紀元前 1414 年頃のテーベであり、アアケペルウラー・アメンホテプ（アメンホテプ二世）の治世 12 年目である。本書ではその当時を生きたさまざまな職種・身分の古代エジプト人たちの物語が登場する非常に興味深い内容だ。

この本では 24 人の異なる社会階級・職種の人々の物語が語られているが、特に興味深いと感じられる点は、一つ一つの物語にストーリー性が仕込まれていることである。それぞれの物語には毎回名前のついた登場人物が何人か現れてストーリーが展開されている。その視点も非常に独特で、酒好きの農夫や社会階級が非常に低い陶工、はたまた一国の王であったりと実に広範囲の人々をとらえているため当時のエジプト社会を客観的にメタ認知することができるという点は極めて魅力的だ。

さらには当時のエジプト社会についての知識も学ぶことができた。物語を進行する途中に、現代研究の視点からさまざまな解説が加えられており、ミイラづくりやオベリスク、行政組織についてなどに加え、「ナイル川は当時そのように呼ばれていなかった」などの豆知識なども知ることができ、読者にとってはとても読みやすかった。

この 24 つの物語から考えたことは、古代エジプト社会は社会階級がかなり激しく、その階級によって仕事量や生活の負担も大きく変わっていたのではないかということである。例えば、エジプトの支配者であるアメンホテプは神の化身として民衆の最大限の期待に応えて国の運営をすることが主な任務であるが、彼はおおむねすべてにおいて最高のものを享受できる。一方で社会階級が低い陶工や農夫、主婦などは肉体的な負担が極めて大きいわりに報酬が少なすぎるといった特徴が見受けられる。当時は現代よりももちろん生産能力は非常に劣っているのに対してそれが支えるべき人口はかなり多く、長時間の労働が強いられてしまうのではないかと考えられる。どのような仕事にも死に至るような危険が隣り合わせにある中で、そのような生活の中でも当時の人々は小さな幸せを見つけていたのだ。洗濯場であるナイル川に行き、地元のほかの女性達と他愛のない会話をしたり、苦労をして作った船や魚網で魚を捕まえて家族にごちそうをしたりと、「生きる価値」というものが明確に存在していたといえる。ナイル川一帯のこの地域に栄えた古代エジプト社会は、飢えに困ることもめったにないため、当時の人々たちにとって快適に住める環境だったといえるのではないだろうか。

今回この本を読んで、新たな視点で古代エジプト社会を観察することができたことで、学校の授業では学べないようなことに触れることができたような気がする。時が進むにつれて幸せの価値観が変わり続けているこの世界の中で、自分の生き方を見つけてみたいと考えた。